慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十二年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第三三四号）

目次

638223

歎異鈔につきて……近角常観……(1)
大経結びの段について……福島政雄……(5)
私の記録……高千穂徹乗……(8)
一道會の記……榊原徳草……(10)
念仏詩抄……木村無相……(15)
二月に思うこと……花田正夫……(18)

第二十九巻　第四号

歎異鈔につきて

近角常観

世間の一般青年および学生が信仰に入らむとするにあたりて門戸を誤らざるものはまれなり。誤り易き点に二あり

一には宇宙問題と関連して仏陀を思考す。即ち宇宙の本体これ仏陀にして宇宙の現象これその作用なりとなす。

二には倫理問題に関連して仏陀を思考す。即ち宇宙の本体を仏陀なりと仮定して、これを行為の理想となし、標準となすが如し。

余は毎年夏期の講習会に出席するを無上の楽しみとなす。第七回の松島にて開催せる講習会までは、前述の如き宇宙の問題、および倫理問題と如来とを関連せしめ、無上の尊き信仰と思惟し、常に人には善を為すべし、敵を愛するの心掛けなかるべからずとして、これを実際に行い来れり。しかるに世の人を見るに我の如く行える者は一人もなし、自己はこれくらいまでに人に尽せるにもかかわらず、他人は時としては恩に報ゆるに怨をもってすることすらあり、ここにおいて、自己は従来の心持より一変してかえって人の敵となるにいたれり。

煩悶、懊悩いゆるところを知らず、誰か自己のこの悶える心中を洞察して、汝は罪人なり、いたって不愍なるものなりと余に同情を寄する友人はなきかと、煩悶の結果床につく身となり、親しき父母の慰めも自分には何等の効なく、日夜転々、憂苦措くあたわざりき。

これそれまでの信仰の誤れるためなりき。これまで宇宙や倫理の問題と関係して得たりとしたる信仰はいまだ真の信仰にはあらざりき、これ誤れる信仰にして心内に描きたる仮定的の仏陀に対せる空の信仰なりしものにして、いまだもって実世間の罪悪の渦中に沈淪せる吾人を罪悪の渦中より救うこと能わざる信仰なりき。

誰か余に一人の同情者なきか、余は今日まで人のためには名誉をも捨てたり、然るに世の人は皆自己中心なり、かく思惟せる時、今日まで余が引立ててきし輩は地位を変じて余を引立つるように見られ、嫉妬、憎悪の焔炎々として

罪悪煩悩の塊となり了うせり。

しかもこれを如何にして解脱し涅槃に入るを得べきか、宇宙問題にてこれを解決せんとして得ず、倫理問題またこれを解決し得ず。誰か余とこの苦しみを共にすべきものはなきか、血涙の中に絶叫したる折しもあれ、突然しかも静かに自己心内に不思議なる同情ある友人の入り来れるあり、誰ぞや、他なしこれ阿弥陀如来にておわしますなりき。

余はここに実際に信仰を得たるなり。余の常に、宗教は実験的ならざるべからずと云うは、けだしこの間の消息なり。実に釈尊は太子たりし時、生老病死の人生の実際問題の解決に苦しみて遂いに出家したまえり。釈尊成道の出発点は人生の実際問題に存せるなりき、生死の問題は学問の有無に関せず、はた貴賤、老若、男女に関せず、一様に平等なり、吾人往生の用心は宇宙問題にもあらず、倫理問題にもあらず、実に人生問題にありて存するなり。

宗教とは絶対無限の如来と相対有限の衆生と相関連するものなり。倫理的行為の理想なり標準なりと称する聖賢もこれ矢張り衆生たるなり、衆生と如来と交渉し、その心において融合す、宗教の有難味は実にここに存するなり。

すでに岸に登れるは如来なり、深渕に沈めるは衆生なり、慈悲あふれたる如来、如何にして深渕に苦しめる衆生を冷然と見殺しするに忍びんや。

如来ならでは与うること能わざるものを余これを人に求めたり、しかも得られず、かえって嫉妬、憎悪に燃えたりき。余は敵を愛せんとしたり、然るに余は敵ならざる人を余の敵と見なしたるなり、我こそ真に敵なりき。この我を如来は愛したまうなり。真に敵を愛するは如来ならでは出来難し。吾人はこの如来の慈悲の力によって往生を遂ぐるなり、他力信仰とは即ちこれなり。

しかるに他力信仰の用心、古来往々誤りを生ず、誤れる信仰に住するものを歎きて、正信に住せしめんとして書かれたるもの、これこの『歎異鈔』なり。

悪しき者を可哀相なりとて救うて下さるのだと思うべし、悪くっても救うて下さるのだと思うべもらず。また、悪い者を助けて下さるのだから、成るべく善い行いをしなければならぬと思うべからず。如来の本願は悪しき者を救いたまうにあり『歎異鈔』の解釈法を説かん。本鈔全十八章中第九章は唯円房の自督にして、第十章は異義を出す。其他第一章より第八章にいたるものと、第十一章より第十八章にいたるものとは彼此相対す。大切な證文とは最初の八章、即ち親鸞聖人の文を云うなり。御聖教とは『教行信證』のことなり。

初めの序に先師と云うは如信上人のことなり。而してこ

の章の選述者は唯円房なりと知るべし。親鸞聖人の正統なる信仰を伝承したる如信上人は六十二歳にして入滅し給いければ、後世その信仰の正統を失わむことを憂い給いて、血の涙をしぼりて記されたもの、即ちこの鈔なり。

次に本鈔の第二章、第三章につきてその趣旨を述べんとす。第二章は誓願についての心得を述べたるものにして、親鸞は誓願の理を知りて信ずるにあらず、如来の広大無辺なる慈悲のお心を頂きて念仏するより外になきなりと申されたるが如く、如来誓願の道理を了解したればとて真の信仰に入りたるにはあらざるなりと知るべし。

第三章は弥陀の名号についての心得を述べたるものにして、いかに殊勝げに念仏を唱うるとも真の信仰に入りたるにはあらざるなりと知るべし。

法然聖人は『選択本願念仏集』を選述したまえり。その意は、衆生には布施、持戒、忍辱等の六度の修行の如きは到底なし得ざる難事なり。如来の御力を頼みとして往生を遂ぐべきは一向念仏の一行にありと教え給えるなり。法然聖人四十三の時まで種々の行をなし給いしかども、未だもって成仏の本懐を遂ぐるあたわずと歎き給いける時、フト善導大師の著書に「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行往坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、これを正定の業と名づく。彼の仏願に順ずるが故に」とあるを読み給いて、忽ち念仏の一行をもって往生を遂ぐるの要道とし給いしと、捨閉閣抛（しゃへいかくてき）とは是なり。

例えば美服を着ても似つかぬ、又着ても直ちに汗にて汚すという如き子供に、手織の着物を与えたるが如し。子は親のその衷心を知ると雖も、これを身に着けずんば、未だ真の親心を受けたるものにあらず、誓願の道理のみを知りもって真の信仰を得たりとする者この如し。又親はこの衣服を着よと命じ給う、しかし自分は他の美服を着る資格ありと雖も親の命令なればこれを着る、自分は親孝行なりと殊勝げに振舞う。これまた未だ真の親心を受けたるにあらざるなり。余は念仏宗なるが故に唱名すとて殊勝げに振舞い真の信仰を得たりとする者またかくの如し、共に未だ信仰の正鵠（せいこう）を得たるにはあらざるなり。

如来の本願は、罪悪の衆生を救済し給うにあるなり。君のためにこしらえたるご馳走は何ぞいたずらに遠慮してこれを食せざるを得んや。中心喜んで誰もこれを頂戴すべきなり。然るに徒らにこれを遠慮し、又は何の感謝する処もなく無遠慮に食する等のことは、自分のためにこしらえられしという親切心を知らざる者と云うべし。その自分の為にこしらえられたる有難さを感謝しつつ食する、これ真心にかなうものなり。

人よ誤て邪信に陥るなかれ本鈔の要旨おおむねこの如し

大経の結びの段について

福島政雄

一　平和のねがい

大無量寿経の五悪段が終りますと、そのあとで、この娑婆世界では立派な行いをするということはなかなかむつかしい。この世で斉戒清浄、身をきよめ心を清めて一日一夜を送るということが出来たら、それは無量寿国で百年立派な行いをしたよりまさる、それ程この世でいい心いい行いということは出来ない、むつかしいものでありと繰り返して申されて、この世で善を修する十日十夜するということは他の仏国で千年もよい事をするという事よりもなおまさっていると説かれております。

こんな所が私の心にとまって居ります。実際、斉戒清浄と、自分の身を謹しみ心を清らかにするという様なことが一日一夜でも自分に出来るかという事を考えてみますと、一日一夜どころじゃない、一時間でも、あるいは三十分間でも自分は出来ていないのじゃないかということを感じますのであります。ここの所を釈尊は見透し、実際この世の中においてこの世の衆生をして立派な事はなかなか出来ることではない、併しながら、そういう出来ないこの汝に、まことの心というものを徹したい、非常にねんごろに教えさとして善をおさめて行きたいというのが釈尊のおこころもちであります。

大無量寿経の結びの段になりまして、佛のはたらきというものが、この世の中を必ず立派な世界にせずんばやまずというお心持が、私共が非常に感じて読みます次のお言葉にあらわれております。

「仏の遊履する所、国邑（こくゆう）丘聚（くじゅ）化を蒙らざるはなし。天下和順に、日月清明に、風雨時を以てし、災厲（さいれい）起らず、国豊に民安く、兵才（ひょうか）用うることなく、徳を崇（たつと）び、仁を興し、つとめて礼譲を修す」

とここであります。ここは私共がこの経を拝読いたしまして非常に明るく感じますところの一つであります。仏様が

おいでになるところ国も村も、どんな丘の上でも山の上でも、仏の御教化を蒙らないところはない。そして天下和順でありますから、天の下平和であり一切の人々は非常に純な心になって、日も月も浊るということがなく、日月共に清く明らかにあって、風の吹くのも、雨の降るのも丁度いい時に雨が降るということになって、災害というものが起って来ない。そして国は豊かになり、人民は安らかに生活が出来る様になって、戦争をするという事は決してない。兵才、戦いの道具を用いるという事のない平和の社会にしてしまう。そして徳の高い人を崇び、情深い心を起して、よく礼儀正しく人にへり下ると。そういう世界があらわれて来る、と仰言るのであります。

これが何時も非常に明るく感じます所でありまして、実際私共この世界というものがこの御経のお言葉通りになればよいという事を念願と致しますのであります。実際皆さんもお感じになって居られましょうが、今日の様に武器と云っては、やあ原子爆弾である、水素爆弾であると、あちらでもこちらでも爆発をやっているという様な有様になっておりますが、こういう世界の有様を見まして、何とかしてこの人間がこんなひどい武器を用いない、世界がお互に和ぎ合い助け合いまして、共存共栄というような事にならないものか、釈尊がここに仰せられるような、こういう世界が開けないものか、何とかして開きたいが、今直に開けそうにないと思いますのであります。

釈尊が仰せられますのには、自分は一切の衆生、諸天人民を丁度子供を父親や母親が思う以上におもっていると、それで何とかして五悪、人間の社会の五悪の姿というものをすっかり絶えさせて、そして五悪から起って来るところの五つの痛みをすっかり消してしまって、煩悩に焼かれるという様な人間の心から、その煩悩をすっかり絶滅してしまって、生死の世界のこの苦しみを抜いてやりたい、そのために仏としての徳を修めるのであると、こういう事を仰言っているのであります。

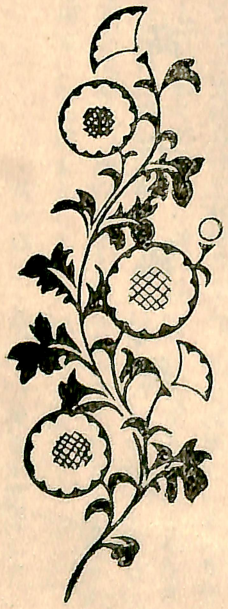
さてこの教えを私共がどう云う風にわが身に受け取るかと云う問題になりますのであります。ここで一寸自由に私の心持ちを述べさせて頂きたいのであります。一体この地球上の人間というものが、今の様にお互に敵視してお互に敵同志の様になって、まさかと云うと非常な殺し合いをしようかという様な有様になって居ります。世界全体のみならず日本の国の内の事を考えて見ましても、御承知の通りに始終闘争また闘争でありまして、今日現に行っているという様なありさまでありまして、実際あっちを見ても争い、こっちを見ても争い、私なんか教育の世界に長く身を

おかせて頂いて居りますが、この教育の世界というところも大分この闘争気分になっているというようなことでありまして、あちらでもこちらでも問題が起って居ります、これは御存じの通りであります。

で、この闘争または闘争、或はお互が敵同志の様ににらみ合っている、或は鉄のカーテンをおろしているという様なこの世の中を、今から先何万年かかって仏様の仰言るような、そういう平和の世界にするというのであるか、そういうことをお考えになるお方もあるようであります。

しかしながらそれはお釈迦様のこの大無量寿経に仰せられてあるところのお心持と、一寸はずれているのじゃないかと思われるのでありまして、釈尊のお心持ではそうではなくて、今この争いだらけの、まかりまちがえば大逆殺をやろうかというようなこの人間の世界というものに、大平和の心をめいめいの心の奥底に開きたい、そのためには、どこまでも弥陀仏の大悲の悲願を、一切の人々の心の底に伝えるのである、その仏の悲願が心の奥にとおるのでなければどんなにお互に平和にしようということを申し合わせてみても、何時も駄目になるのであって、そんなことを一万年たっても、五万年たってもこの世の中というものが平和になるのじゃない。お互の申し合せというものは何時でも破ることが出来るようなたよりないものである。そうでなくて、どうぞこの地球上にありとあらゆる人々のせめて仏法の教を聞くという人々の心の奥に、この大悲の悲願、阿弥陀如来のお心持というものが、心の奥底にとおるようにありたい。このために自分は今このことを述べ説いているのである、こういう風に仰言っている様に受け取れますのであります。

大平和を、一万年、三万年の後ではなくして、今この争いばかりの様になっているところのこの社会に住んで居りますところの私共一人一人のいのちの上に仏のまことのいのちというもののしみ徹って来るのをいただく、何処までも闘争気分ばかりを持ち続けているゆえに、喧嘩根性というものをあわれむという仏の大悲が、どうかとおるようにと、そこから世界は変って来るのである。そのままに変ってくるのである、一万年の後に変って来るのじゃない、とこういうことを仰言って居られるように受け取れますのであります。



私の記録

高千穂徹乗

生と死は一体

死は無情にすべてを奪い去る。死を前にしては地位も名誉も権力もまったく無力だ。これまでの私の死にものぐるいの勉強とはいったい何のためだったのか。死に直面してみれば学問や名利など実に無意味でないのか。このことに気付いて私は虚無感に捕われた。

「死」の壁につきあたって私は「生」について真剣に考えた。われは如何に生くべきかについて深い思いをこらした。私は何ものかをつかもうと思って一心に思索し、読書をつづけた。たしかに頭の中では概念として理解することが出来ても、死ぬることは恐ろしく、真実に生きることはさらにむずかしい。私の力がいかに弱く、私の足どりがまことにあやういことに気付いた。そこで私は寮を出て、京都の西、桂離宮の近くの百姓家の二階を借りて自炊をはじめた。学問でわからぬことは、じかにいろんな人物にぶつかって安心を得たいと思った。

虚無感の壁

私は京都の各所にすぐれた宗教家を歴訪した。有名な人もあったが、私が得たいと思う答えに接することはできなかった。つぎに奈良、滋賀の田舎の爺さん、婆さんの信者を訪れた。世間的に有名ではなく、また立派な仕事も残していなかったが、真剣に道を求めた人達は、みずからの体験によって非常に深い霊性を開発し、すぐれた聖境に達していた。

宗教の要諦は自我のとらわれを捨てることであろう。ゆえに回心とか転心とかいわれるものは、跳躍と決断を必要とする。人間は自我を持っているからこそ発奮もし勉強もする。富や権力や地位を得るために自我を握って離さない。しかしそれらは死の前にはすべてが無力であるように、富や権力、地位を手中にした人がまことの安住を得ているかといえば決してそうではない。ひとつをつかめば、さらにひとつを求めて、つねに不安におののき、つまずくと

酒や勝負ごとで不安をまぎらし、ごまかそうとしている。

自我のとらわれ

宗教はその自我を離せという。人間は順境でも逆境でも自我をしっかり握ってなかなか離そうとしないものだ。棒高とびの選手は頂点に達したとき握っていた棒を捨てる。いつまでもつかんでいるとケガをする。私はどうしたら安心を得られるかと思い悩んで、その苦しみの頂点にあったとき、あるお婆さんがこんな語をしてくれた。

「蛙が深い井戸に落ちこんだ。人がこれを助けようとツルベを入れると蛙は綱にすがってはいあがってきた。もうすこしで人の手が届くというところに来て、蛙は人の姿を見てまた落ちてしまう。何回やっても同じだ。蛙はそれでもはいあがり、また落ちてはツルベにすがりついていった。おそらく最後の根気を振りしぼってであろう。蛙がはいあがって来た。こんどこそと人々が手をのばしたときまた落ちた。精根つきはてた蛙は手足を投げ出して水の上に浮いてしまった。だがこの時、蛙は救われた。腹を返した蛙をツルベがすくって地上に引きあげることが出来た。」と。

悩みぬいた末

この話を聞いて私はスカッと世界が開けた気がした。理屈では説明出来ないが、何か大きな世界に包まれていることを感じた。

毎朝の勤行がその日から規則でするのではなく、心からおつとめすることができるようになった。生きることに望みとちからが恵まれた。仏道の修練で「大死一番、大活現成」とか「百尺竿頭一歩を進める」という。また「両手をはなしてすなおに仏の呼び声を聞けよ」と教える。おぼれる者はワラをもつかむというが、ワラをつかんだのでは、つかんだまま沈んで行く。手足の力をなくして、救うて下さる人にまかせることが肝要だ。

私達は「生」と「死」とを別々のものに考えて、生きることだけに精魂をかたむけ、また死ぬことだけをおそれている。しかし、生と死とは一枚の紙の表裏のように一体である。ゆえに「人生いかに生くべきか」の意義を領得したものは、死ぬことにおどろきを感じない。また安らかに死ぬることのできる者は、生きることのよろこびとのぞみを体得したひとである。

わが国の浄土教を大成した法然上人は、次のように申されている「生けらば念仏申さなん、死なば浄土にまいりなん、とてもかくてもこの身には、思いわずらうことぞなきと知りぬれば死生ともになんのわずらいもなし」生きることも喜びであり、死ぬことも恐れない。このような死と生とも超克した心境を安心立命というのである

——昭和四三、七、十。西日本新聞——

一道会の記

榊原徳草

次に**西元宗助先生**のお話を誌します。

今日は、有難うございます、という御恩ということについて、恥ずかしいなあ、と云う事を感じます。有難いなあと同時に、恥ずかしいなあ、ということを伴います。

感謝とは、感謝だけであれば観念的で、感謝の極まる所は、先程の花田先生のお言葉のように慚愧があります。慚愧の極まる所は感謝であります。曽我量深先生のお言葉によれば「大地に深く慚愧の根が張って奉謝の花が咲く」。このお言葉は誠に的確だと思います。例えば、今日改めて思いますが「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」この御和讃は泣きながら書かれたに違いありません。恩徳讃は即慚愧讃でありましょう。その意味において、晩年の御製作の「浄土真宗に帰すれども真実の心はあり難く、虚仮不実の我身にて清浄の心もさらになし」の聖人の愚禿悲歎述懐和讃は、あれは恩徳讃でありましょう。この第四首にまいりますと「無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども弥陀の廻向の御名なれば」とあり、そして「功徳は十方にみちたまう」そういうことが、今此所に居てあらためて思われることであります。

本当に、有難いとも、恥ずかしいとも思っていない、無慚無愧以上、本当に何ともならない、なればこそ改めて私は私なりに「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちたまいける本願のかたじけなさよ」のおこころを仰ぐ次第であります。

なお一言つけ加えて頂きますと、今日は、アメリカにおける仏教の第一人者の海野大徹博士が来て居られます。今同志社大学に来ておられるのですが、アメリカにおける学問的仏教の総元締をして居られ、あそこに見えておられます。先生お立ち願います。（大野博士起立される）有難うございます。このあいだ本願寺の国際仏教センターで御講演になりました。非常に大事な方でございます。

次に**宮地廓彗先生**のお話を誌します

一道会には毎年ご案内頂いて居りますが、先程の田村先生と同じような事情で五六年ご無沙汰しております。本年はこの日曜日をあけておかねばならぬ事もあって寄せて頂きました。

先程の先生方のお話になられたことは私も身に感じて居ることばかりで、別に申上げることはないと思います。池山先生と私とのご縁というものは花田先生を通じてであります。その花田先生とのご縁は松本先生を通じてであります。松本先生とのご縁は横田慶哉先生を通じてであります、そういう因縁が重なって池山先生のお話を聞くことになったのであります。

池山先生の思出を申しますと、先生が信仰を求められる時のお話で、先生が六高に教授をされて居る時には、すでに歎異抄をよく読んで居られ、又講演なども依頼されて、皆様からも有難い方と思われていたが、先生の言われるには、

「自分にとって一番不思議に思われるのはお念仏が出ないということでありました」信じておりながら念仏が出ないとは、如何なることであるか。恐らく先生も仏様の前に坐られるとか或は講演に出ればお念仏が出ないことは無かったろうと思います。それにもかかわらず、自分にはお念仏が出ないと言われるのは一体どういうわけなんだろうと、そこに大事なことが言いあらわされていると私は思うのです。

お念仏が出ないということは、お念仏が自然に身について出てこないということと理解して居ります。自然にはからわずにお念仏が身について、そこから流出してくる。先程田村先生も仰言いました「念仏申さんと思いたつこころのおこるとき、即ち摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり」。念仏を申したから、それでたすかるのでない「念仏申さんとおもいたつこころ」が信心の信であって「信をはなれた行もなく、行を離れた信もない」と聖人は仰せられます。おのずから身に大行をともなうような大信を仰せになるので、「頭の中で信じておればそれでいいでしょう、念仏は称えんでもよいでしょう」となりそうですが、歎異抄の信心の境地は、少くともそんなことではない。

念仏申さんと思いたつこころのおこる時にですね。摂取不捨の利益にあずけしめたまうのであって、池山先生は恐

らくそのことに気づかれたことと思います。信仰の体験は無かつたことに気づかれたことと思われるのです。世間の人が念仏の信者として許してしまつたときにですね、そこに深く反省されるということは希有なことであります。

法然上人は四十三の時に信仰にめざめられました。上人は智慧第一の法然房と言われ、その時代、叡山きつての学者であられました。その智慧第一の上人が、四十三歳まで迷い続けて居られた。そこまで永い年月迷い続けられました、言い換えれば、真実を問い続けられたことに頭が下るのであります。真実の前に頭を下げてゆかれた上人のことが、又池山先生の反省に相通ずるものがあると思うのでありまして、念仏申さんと思いたつこころになつた時、大信からおのずから流れ出てくるお念仏だということ、その時に先程花田先生の話されたように、言葉として与えられたそれが、言葉として働き出してくることが、信仰の上には大事になると思います。

大行ということを特に云われることは、信仰が身につくことで、念仏が出ないことは、念仏が身について居ないことであります。私全体が念仏になっていないということであります。信の上からおのずから身を通して称えられてくるお念仏は、それは如来から我身を通しての御呼声であると受けとらざるを得なくなってくるのであります。これはわれ称うれども、これ如来招喚の勅命なり、であって、そういう如来の勅命、声なき声を聞かせて頂く。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信ずるのを、そういう名号一つを接点として仏様は大慈悲をそそがれる。大慈悲が大慈悲と本当に身についてくればナムアミダブツと声に出ずにはおられなくなることをいうのであります。せしめられる、というので、たとえば、親の親切が身にしみ通れば、お母さん有難う、と云わずには居られなくなる。そこが「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とのお教化だと思うのです。ただ念仏してとは。念仏の申されるような身になるということなんでしょうが。そういう名号の尊さを思うときに、それ以後は念仏しどおしになるのかというと、そうではないでしょう。

信以前の念仏は、時々思い出して、意識して申すのですが、信後の念仏はいつでもの念仏、お慈悲の中にひたつている念仏、それが時々声になって現れてくる。ここを「口には時々念仏すれども常念仏なり」と云われますが、その通りです。安心決定鈔には「身も南無阿弥陀仏、心も南無阿弥陀仏」とあります。要するに常念仏の中に念仏させていただくことになると思うのであります。

安心決定鈔には「時々仏の功徳を思い、口に称うるが故

に、念仏うとうとし」、それでは仏様と私とが離ればなれになっている。だから「人に見参、宮仕いするに似たり」で、仏様に御機嫌伺がいしに行くようなものというのです。これでは何時死んでも大安心とはなれないと思います。

「大悲の願行はもとより迷いの凡夫の心想中に入りたまえり」とも「もとより機法一体に成じたまえることなりと知らずして信知するなり」ともあります。池山先生は微に入り細にわたって、行きとどいて私達を導いて下さいました。私にははじめの御縁は何といっても横田先生の御縁であったと思いますが、先生によって開かれた信念をつちこうていただいたのは池山先生、福島政雄先生、金子大栄先生、白井成允先生方でありました。諸先生方のお育てを頂いて信の歩みを続けてまいったのが私であります。

顧みれば、我が足跡のおぼつかなしやであります。その中にあって先生方の御恩が想い起こされる。遠く離れてみて漸く御恩がわかるような私であります。遠く離れる程、気づかせて頂く、いただいた有縁の善知識の御恩を一入有難く思うことであります。

これから私共は知四明寮の羽溪了諦先生の奥様の米寿のお祝いにまいることになっておりますので、これで失礼いたします。

次いで**川畑愛義先生**のお話を誌します。

私はここへ伺うのは色々な昔なじみに会えるのが楽しみでまいるのですが、私の様な者がこんな場に出るのは何か場違いの感じがするのですが、それにしましてもこの有縁の方が漸々に減ってゆかれるのが淋しいことです。池山寿夫先生、白井成允先生、それから松本解雄先生、先生方は何十年来の先達でありますが、私共もやがて、残る桜も散る桜であります。

お念仏申させて頂くとお浄土で会える、お浄土が段々賑やかになる、けれど一方私の凡情としては悲しい思いですことに私共のように晩年になりますと、本音を云うと死にたくないという気持があります。私より一寸若い京大の東昇さんが、心筋硬塞で狭心症発作をおこした時、たすからんじゃないかという気がした時、死にともないということだったと告白しています。私自身も、もっと長生きしたいという潜在意識があるようで、そういうことを心の底に置いて、安楽死など色々な問題がとりあげられています。

死ぬことを考えますと、池山先生の御臨終のことが今眼前にあります。お亡くなりになる瞬間まで私はついて居りました。それを申上げることは私の気持が整理されて居らないので出来ません。私の母のその事について一寸申して

みたいと思います。

母は八十歳で肺癌で大学病院に入院しました。私は親不孝で西元先生や宮地先生はよくご存じですが、せめて最後にと、私は母のベッドに並べてベッドで寝ることにしました。或る晩フト目が覚めて見ますと、今でもその感動があるんですが、母がジーッと私を見て居るのです。私も何も云わないで母を見つめておりました。その母の眼差しというものが、自分の寿命を知って居りますような、本当に遣る瀬ないというような、私は三人兄弟ですが、残った一人の私に対する切々とした愛情の眼差しというのが全身をもって感ずるようでありました。

これと関連して最近読んだものに、こういう事があるんです。一寸読ませて頂きますと、これは或雑誌に出たんですけれど、詩人であったお坊さんの中川定尊さんという人が「眼差しにとける」という詩を作っておられる。

眼差しにとける
とければ私なし
ない私にはなしなし
ただ眼差しにとける
とけてあなたになる

結局私は、そうした母の切々たる愛情、自分の死をも忘れて私に注ぐ限りない切々たる慈愛というものを、こんなに深く感じたことはありません。そういうような母の切念によってこの年まで無事に生きてきた、そういう母の全身的な子への願いというものが、これを仏様の方に転じて考えますと、弥陀の本願、仏様の慈愛はもっと大きなものですけれども、私の母から受けたもの、全身これ母の愛の賜ものそのものである。親子という対立でなしに、解けて私になっているというようなことを感じまして……。私が念仏を称えるとか、信仰のこころをおこすとかでなしに、異抄第一章にあるように「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて云々」という仏の誓願と母の願いが一つにおもえたのです。妙好人の浅原才市さんは「わたしのこころがあなたのこころ、あなたのこころが私のこころ、わたしがあなたになるのじゃないが、あなたがわたしになるこころ」と言う。結局、私に念仏称える心が起るはずがない、私になって下さるあなたのこころが称えるのです。さすが妙好人という方は言葉をもって私を導いてくれます。

今日は私を育てて頂いた古い先達、花田先生、宮地先生、田村先生、西元先生、榊原先生。さてまた今日はアメリカからはるばる来られ、私も彼地で大変お世話になりました海野大徹先生、こういう珍らしいお方とお会い出来て大変嬉しいことでした。御縁があれば来年も皆様と共にこの縁に遭いたいと思います。

念仏詩抄

木村無相

マコト

マコトを求めて
マコトを求めて
マコトはついに
この身には無く
マコトはただただ
念仏なりき——

マコトを求めて
マコトを求めて
マコトはついに
この世には無く
ただあの世よりの
念仏なりき——

ただただ

あの世よりの
念仏なりき——
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ああ　お浄土は（一）

親鸞聖人
讃阿弥陀仏偈ご和讃に
〃安楽無量の
大菩薩——
安楽浄土に
いたるひと——
安楽声聞
菩薩衆——

安楽国を
ねがうひと——
安楽仏土の
依正は——
安楽国土の
荘厳は——〃

ああ
お浄土は
安楽境——
〃三塗苦難ながく閉じ
但有自然快楽音
このゆえ安楽となづけたり
無極尊を帰命せよ〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ああ お浄土は（二）

ああ　お浄土は
聖人さまの待ちます
ところ——

親鸞聖人・末灯鈔に
〃今はこの身は
歳きわまりて候えば
定めてさきだちて往
生しそうらわんずれば
浄土にて
必ず必ず待ちまいらせ候うべ
し——〃

ああ　お浄土は
聖人さまの待ちます
ところ——
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

往生の業には

親鸞聖人
末灯鈔に
〃往生の業には
私のはからい
あるまじく候なり
あなかしこ　〈〈
ただ如来に
まかせまいらせ
おわしますべく候
なり
あなかしこ　〈〈〃

ただ
それだけのこと
ただ
それだけのこと
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それだけ

親鸞聖人
仰せには
〃ましておのおのように
おわしまさん人びとは
ただこの誓いありと聞き
南無阿弥陀仏に
遇いまいらせたもうこそ
ありがたくめでたく候
ご果報にて候うなれ
とかく計らわせたもうこと
ゆめゆめ候うべからず〃

ナムアミダブツに遇う
ナムアミダブツに遇う
ただ
ナムアミダブツに遇う
ただ
それだけ——
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

二月に思うこと

花田正夫

一、世間虚仮・唯仏是真

二月二十二日は太子の御忌日であった。例年のように聖徳太子の教えを頂いた。そして太子が公の席でもなく、文章に書かれたのでもないが、御家庭での常の御持言の「世間は虚仮なり、唯仏のみ是れ真実なり」の聖句をじっと仰いでいた。

これをひとりごとのように繰り返される太子の御心中はどうであっただろうか。仏法に開眼せられた太子は、まず氏族制度によって塞ざされていた人材登用の道を冠位十二階の制定によって開かれ、国とその民の進むべき道を十七憲法に定めたまい、更に随、唐に留学生を派遣されて文化の向上の道をひらき、あらゆる国民の声を聞かれて、応病与薬（おうびょうよやく）の仁術を施こされたのである。然し惜しいことには壮年四十九歳で急に亡くなられたことであった。岡山医大の恩師、生沼曹六教授は、当時の事情から推して中国から入った天然痘でお妃と前後して亡くなられたと思うと云われたが、想像に難くない一家言である。

こうした御生涯を貫ぬいての常持語であるが、私はいつも思う、常の仰せというものは、その人の心のからだであると。何時でも、何処でも出せるのは自分自身の手である、借り物ではそうはいかない。して見れば太子に直かにお目にかかれる場所がこの聖句に相違あるまい。

とつおいつしているうちに、聖徳太子を日本で誰よりも尊崇し、随喜せられた第一人者は親鸞聖人である、してみれば聖人のお言葉の中にこの聖句に相当するものは、と思い到った時、歎異抄の総括文にある聖人の仰せ

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

があった。あだかも太子の聖句を意訳せられたような趣きがあるが、聖人の時代には、この句のある天寿国マンダラは公開されていない。唯信味を同じゅうされる故に自然の一致である、時と所を超えた信界の妙味である。

さて、太子が世間と仰言るのに、衆生世間と器世間の二つがある、例えば浄土は器世間で、そこの仏や菩薩は衆生世間である。娑婆の衆生は、煩悩具足の凡夫であり、世界は、火宅無常である。そこはそらごとたわごとばかりで、まことは微塵もないとの御述懐で、そのままが、世間虚仮なすがたである。然しこれは他人事でなく私共自身の実状である。

ここで太子を憶うのに、太子は勝鬘経を深く随喜されているが、この経は、菩薩の中でも第八地の不動地を理想として説かれている。この地位に入って凡夫地を脱して凡夫だったなあとの自覚が出来ると教えられる。まして凡夫は夢中夢を知らぬと同様でその自覚は出来ない。唯々その仰せを聞いて信知させて頂くばかりである。親鸞聖人はその内容を、凡夫というは無明煩悩われ等が身にみちみちて、欲も多くいかりはらだちそねみねたむ心つねにひまなくして、臨終の一念にいたるまで、たえずきえずとどまらず、と仰言る、これが聖人の信知のままである。

次に、火宅無常の世界については、法華経の火宅三車の譬である。古い大きな家屋が燃えて今にも崩れようとしているが、子供達はそれをよろこんで遊び廻っている。これを見た親が、危いと言っても驚かない。そこで早く出た子に大白牛車、次の子に鹿車、次の子に羊車を与えると告げると、車が欲しさに飛び出して来た。親は子の安全なのを見て喜び、平等に大白牛車を与えたとの譬である。これは誰もよく知っているものであるが、私はふと、この煩悩の火に遊びたわむれている子供こそ私だなあ！と気づかせて貰うにつけて、この娑婆世界の無常さや煩悩の焔の恐しさを私には気づく力はない身と愧じ入った。狂句にも、あたら世を仏になすな花に酒とあるように、煩悩の酒に酔いしれて、真実を求めようともしないのが私である。

以上によって、煩悩具足の凡夫も、火宅無常の世界も、私共には気づき得ないところであって、仏のみがしろしめすのであった。池山先生は囲碁が三段で、相手がなくてよく独りで碁盤に向っていられたが、たまに人の興じるザル碁を見物する時、御本人は最善最上と思ってやっているまんま、先生の目には見ておれない、ハラハラとさせられる、と云われ、大きな悟りを得られた仏陀の御目には、我々のかしこげにやっていることをどんなにかハラハラして見ていて下さるだろうか、と仰言ったことがある。火宅無常も煩悩具足も、仏眼にうつる私共の憐れな姿であって私共はそれを信知させて頂くばかりである。

次に、唯仏是真であるが、聖人はこれを、スッパリと、ただ念仏のみぞまことにておわします、と述べられる。そ

もそもお念仏、お名号とは、弥陀仏の本願の成就された至極である。その本願のおこりは、苦悩の有情を捨てたまわぬ大悲の発露である。火宅の危険も、煩悩の罪障も自覚出来ぬ私共を悲憐された本願である。世間では駄目を駄目と見ると捨ててかえりみないが、仏の大悲は、それを捨て給わず、やがて真実に転成せしめるまでやみたまわぬ生きたおまことである。

私共は、相対分別の智慧しかないから、仏の真実と聞くと虚仮と対立させて考える。そういう真実はそのまま有限である、仏の絶対の真実は虚仮をつつみ、やがてとかして同じまことに転成するまではやむことのない真実である。

たとえば子は生長するにつれて母の膝を離れて行くが、母は子を追うて何処までも親のふところにかえさずには居らぬ。飽くまでも子になりきって、子の心をとかして行く、やがて子は自分の反逆心を愧じて親の胸に帰えらされるものだ。但しこの世の親は、親であっても凡夫である。その力に限りがあるが、仏の無碍光の徳化は、虚仮の凡夫をして必ず真実に転成して下さるのである。

忘れもせぬが、大正時代に悪徳商人の鈴弁を殺害し、その死体を行李詰めにして池に投げ入れていたことが発覚し、死刑に処せられた山田憲のことである。不思議にも刑の決定後に藤井教誨師の導きで念仏者に転じたが、彼は「私には歎異鈔の第一章だけで十分です。罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願をおこして下さり、悪をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと仰言る。東大を出て、商工務省の役人にまでなった私が、天下の大罪を犯し、一切の人々に懺悔することも出来ぬのに、この極悪人を仏のみよくしろしめして、悪人を成仏せしめんとお呼びかけ下さるとは！」と満腔の感謝をしている。

親は子になくてはならぬことのために営々と苦労して下さる。仏は私共凡夫になくってはならぬ迷いを脱する道を成就して、称えやすく、たもちやすい名号となってあらわれて下さる。しかも老少善悪のへだてもなく、行住坐臥をえらばず、時処諸縁をきらわず、時節の久近も問わず、御名とあらわれて下さる。よき人々は異口同音に「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、たえず呼びかけて下さる、どうして帰せずに居られようか。

中国の道綽禅師は、曇鸞大師の碑文の「吾すでに凡夫にして智慧浅短なり、未だ地位に入らざれば念力をひとしうすべけんや。草を置き牛を引くに、つねに心を槽櫪（そうれき）に繫くべきが如し。あに縦放にして全く帰する所無きを得んや」とあるのに驚かれて、「大師如き大徳なを愚牛と仰言る、いわんや余が如き小子云々」と、直ちに念仏の一門に帰し、一生造悪の衆生の引接のために「我名を称えよ」とおちかい下さる大悲を身一つに頂かれたのである。

又高野の学僧の明遍僧都は、法然上人のお勧め下さる専修念仏は、重病人の胃腸も弱った乞食に与えられるお慈悲のお粥であったと気づいて直ちに念仏者となられた。

親鸞聖人はまた恩師の専修念仏の仰せをうけられて、正信念仏の無碍の大道を顕彰せられたのである。そこに聖人は「唯仏是真」のこころを「ただ念仏のみぞまこと」と信証せられたのである。

私共もまた、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを衆って広大無辺の仏の真実心に浴することができ、太子の仰せをそのままに頂けるのである。

二、仏の涅槃におもう

二月十五日は仏陀の御入滅の聖日であった。有縁の寺でサラソウ樹の下に示寂（じじゃく）せられた涅槃像を掲げ、そこにあらゆる人々、そして鳥獣にいたるまでお別れを悲しむ姿を拝しながら、佛恩を謝しまつられたことを思う。ここに改めて本年も仏陀の入涅槃を憶念し、讃仰させていただく。

さて、華厳経の入法界品にある善財童子求道物語りの絵巻物を拝すると、善財の求道のはじめは、佛廟の東で文殊菩薩の説法を聞き、導かれて五十三の善知識を歴訪するのであるが、この求道の旅は佛廟の東がその起点であることに驚かされる。

原始仏教の根本聖典の筆頭である長阿含経は、釈尊の御入滅の状況を簡明に伝える佛遊行経をその巻頭に置いてあるときく。これは仏弟子達にとっては、仏陀の内心への誕生は釈尊が地上のお姿を消されてから、順次に始まって来ることを示されたものと思う。この世の親も生前よりも死後に嬉しいにつけ、悲しいにつけ、今まで気付き得なかった親の心にふれ始めるものだ、まして三世にわたる久遠のみ親の人々の心に顕彰し始めるのは、御入滅からである。

大無量寿経には「滅度を示現して、極済（じようさい）することを極りなし」とある。世間では、いのちあってのもの種、どうか長寿していつまでもお導き下さいと云うのが一般であるのに、無限の救済が滅後にあらわれると説かれている。

私は或時、私共が誕生を祝うのは生存中であって、死後は忌日に集るのが一般であるのに、釈尊は花祭り、キリスト教ではクリスマスを祝うのが得心いかなかったが、こうした真人は死を越えたまことのいのちを持たれていて、年々に人々の燈明となりよるべとなって下さっている実状を知るにつけ、永遠に誕生祝いが続く真意が知らされたことがある。

これは私の知った当市の刑務所で処刑された死刑囚の人であるが、

「私は死んでいくのではありません、浄土へ生れるのです。今までは一寸独房を出るにも手錠をかけられ、看守さんに厄介をかけましたが、浄土では自由自在の身となって罪のつぐないも、恩がえしも存分にさせていただきます。今日はその浄土への船出です」

と、世話になった方々にお礼を云いながら別れを告げた人があった。煩悩の満足することにかかりはて、空しく人生をすごす私共に、大きな警鐘を鳴らして、生死を越える大道を教えられた。

また度々誌して恐縮であるが、白井成允先生の御遺言、

「これから父を思い出す時には、お念仏申しておくれ、父はお念仏の中に何時までも生きているから」

と、御息女に仰言ったことを憶う。先生の肉身は亡くなられても、お念仏の中に何時までも生き続けられるおいのちをあらためて仰ぐ。

これは法然聖人の御遺言に

「自分の廟所を造るな、そんなところには居らない。どんな賤が家であろうと、念仏の声のするところがわが廟所である」

と、臨末にお弟子に告げられたことに通じる。

また、親鸞聖人の御臨末の御書と伝えられる

「わがとしきわまりて安養浄土に還帰すといえども、和歌の浦曲（うらわ）のかたを浪の、寄せかけ寄せかけ帰らんにおなじ。

一人居てよろこばば二人と思うべし、二人居てよろこばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり。

我なくも法はつきまし和歌の浦　あをくさ人のあらんかぎりは」

も想到させられることである。

以上、死刑囚、学者、聖人方の上に、肉体の死によって消されぬ、新しい生への尊さを知らされる。それは今現に煩悩の大海に流転し漂没する私共があれこれはかり知れないことであるが、私共は有縁のよき人々の往生によって、地上ではお声をきくことも、お姿に接することもできないが、お念仏の中により親しく、よりありありとその徳光に触れはじめたについて、生死を超えた、死によって遮えられぬまことのいのちを信ぜずにはいられないのである。

最近死について、安楽死とか、尊厳死とか取り沙汰され、今まで聞きもしなかった寺やお宮に、ポックリさんを

祭って、老いた者が長患いをして周囲の人々に迷惑かけず、ポックリとおさらばしたいと祈願している人々が多い。そのことの是非はともかく、そういうように老人が願うには一つには終戦以来それまで日本に発達した家庭道徳の破棄による不安と、経済の天井知らずの上昇にもよるので、まことに同情に堪えぬが、さて思った通りにいかぬのが世の常である。又安楽死をしたかと云ってそれが何の価値があろうか。昔は、死を見ること帰するが如しというようなことを立派なこととした時代もあるが、死にざまの如何によってその人の値打があがりさがりするものでもあるまい。結局は動物が種々の死にざまをするのと同じである。

そこに、仏陀によって開かれた道は、死によって砕けぬいのち、そこからはじまる新生、これあって、安んじて死んで行けるのである。又そこに死にざまの如何は、それぞれの業報にまかせることも出来るのである。

私には、自分の死はどうしても自覚出来ないと知らされた。執着の強い、うぬぼれのやまぬ身のつねとして、自分に都合の悪いことは拒否して自分には起らないこととひとりきめしている。自分が悪いとか、愚かとか、更に老いとか死とかも自覚出来ないのである。だから死に直面しては、こんなに早く死ぬとはと、あわてふためきながら、段々と体力がつきて死ぬるのが当然の帰結である。平素口ではえらそうなことを言っても、それは常の時のことにすぎない。長塚節氏が喉頭結核という診断で絶望の時

生きも死にも天のまにまにと平らけく
思いたりしは常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといわまくを
恥じて思（も）いしはみな昔なり

死がせまって来ると死ぬる覚悟も何も出来ていない自分を見出すのである、それほど浅薄な私であり、自分の死の問題を避け続けているのである。ここで、歎異抄の九章の後半「名残り惜しく思えども、娑婆の縁つきて力なくしておわる時彼の土へはまいるべきなり」の外ない私共を「いそぎまいりたき心なきものをかねてしろしめして、ことに憐みたまうなり」のたのもしさを仰ぐばかりである。

仏の涅槃の日に、いよいよ仏慈にまもられる身、それ以外には永遠のほろびへの転落しかない身をかえりみて、広大な恩徳を謝しまつるばかりである。

と も し び

聚墨生

○

子の母をおもうが如くにて、衆生仏を憶すれば、現前当来とおからず、如来を拝見うたがわず

（勢至和讃）

子は親を忘れるが、親は子を念じ続ける。この母のまことに子が気づくとき、母を憶（おも）いはじめる。それにつけて姥捨山の古歌をおもう

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ
親の身すててかえる子のため

自分は捨てられながら捨てる子のために道しるべをする。子は母が帰るための枝折りと思い、山深く行って捨て去らうとすると、母は「これ以上生きているとやつかいをかけるばかりだから、ここで死なしてもらう。ただ前途あるお前が道に迷わぬようにと思って枝折りをしておりたから」と告げる。子ははじめて母の真意を知り、わびて家にともなって帰ったという物語である。

私はこれをよく聞かされたが、おうように聞き流していた。或日、ふと姥の枝折りする心を憶った。姥はすでに山で死ぬ覚悟である。姥のいのちは、自分を捨てる子のための枝折りと現われている、その枝折りをのけて真の母はいないと、そこに思い至った時、弥陀仏が名号と現われて下さる真心の片鱗を知らされた。御名をのけて弥陀仏はましまさぬ。そのおいのちの全分、智慧と慈悲のありったけが御名と現われて下さっている御恩を謝し、身勝手な解釈をして軽く聞き流していたことをおわび申すばかりであった。

五十二年、一月、四日。

○

念仏の興行は愚老一期の勧化なり。念仏を修せん所は貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでもみなこれ予が遺跡なるべし。

（法然上人説話）

岡山生まれの私が、病に障えられて二十年ぶりに帰郷した。下り列車が大阪を過ぎると、車中のここ、かしこに岡山なまりが耳に入った。すると親類縁者の心地がして、その声に強くひき寄せらた。

そこで、平素は郷里は遠い所と思っていたが、お国言葉の中に郷里は私の体内に温存しているのに今更のように驚かされ、思わず、お国言葉が故郷である、とつぶやいた。

さて法然上人の晩年、法蓮房が、ご滅後のご遺跡をどこに、とお尋ねした時「念仏の声のするところ、あまねく予が遺跡である」を仰言っている。

聖人のお国言葉、いのちの言葉はお念仏であり、従って私共にお念仏が浮かぶ時、どんなに遠く離れていようと、また何百年へだたっていようと、そこに聖人の御遺跡、浄土の光がさして、直かに聖人にお会いできるのである。

私がかって読んだ詩「旅人」の中に、田舎の青年が大都会に出ての歎きに〃どこへ行ってもよそ人だ。おらが国さの言葉が聞けぬ〃とあったのが心に深く刻まれている。

それにつけても、法然聖人のご流罪の時「南無阿弥陀仏と唱えたまえば源空に親しとす。たとえ肩を並べひざをくむとも念仏をことしない人はうとし」仰言ったこともさこそとうなづかされる。

五十二年、二月二十日。

○

道光明朗超絶せり、清浄光仏となづけたり
一度光照かぶるもの、業垢を除き解脱をう。

（親鸞聖人。浄土和讃）

「生は苦なり」とかねて仏陀が教えられる通り、苦のない人はないが、その中に苦に負けてるい人と、苦に勝っている人がある。前者は愚痴に閉ざされ心も闇く世間を白眼視する。後者は、憂き事のなをこの上に積れかしと、それで自分を鍛錬し、意志も強く、事業にも成功するんである。

我々も後者のようになりたいが、この種の人は苦労を誇り、それを鼻にかけ、人にもそれを強いる、だから人から敬遠される、それが慢心の毒である。

思うに苦に負けてくじけ、苦に勝ってほこるのは、同じ迷海の浮沈である。そこになくてはならぬのは大きな飛躍である。それで卑屈の垢と慢心の毒が洗われて、一切の苦悩の人々と同心し、ともに悲しみ共に喜ぶ広大無辺の天地がひらける。

しかし云うべくして行い難い。先哲も洗えば洗うほど汚れる手とも、血を血で洗うも綺麗にならぬとも告白していられる。すっかり煩悩のかたまりの身には、弥陀仏のこのことを知り抜かれての大悲心からそそがれる清浄光仏の徳光を仰ぐばかりである。波岡茂輝氏の歌が思い出される。

限りなく溢れる水もきよめそそぐ水たえざればわれはやすけし。

五十二年、四月二十日。

あとがき

四月は仏陀の降誕の聖月、有縁の各地に、誕生仏を中心に草花で飾り、童男童女が、讃仏歌を声高らかに合唱する光景は、和やかな思出として生涯のこることであります。

量りなき時の昔、生死のなやみ永く尽くし
吾等に清けき道を教ゆ、み仏は智慧の灯火なり
生よ死よ病よ、憂き悲しみの悩みせまれる
人もひとたび仏にあえば、心は浄き世界に入らん

○

近角先生は、異なる者を裁き排するのでなく、それをわがこととして歎き悲しむ唯円房の心をそのままに我身にうけられての御親切なお導きを頂きました。

福島先生は、大経の五悪段を身読されて、仏出世の本意をお述べ頂きました。

高千穂師は、仏教学者としてその研修につとめられ、やがてそれに飽き足られず、あちらこちらと善財童子の求道の旅に似た歩みをせられたはてに、篤信の一老婆の言葉に仏心を仰ぎはじめられた御体験の記録を頂きました。

榊原師の一道会の記は、西元宗助、宮地廓慧、川畑愛義さん方の信味を筆写して下さいました。赤色赤光、白色白光、黄色黄光の仏光をそこに拝しました。私の様な難聴者には新しい思いで読まして貰いました。

木村さんの念仏詩抄は、法味がホロリホロリとこぼれてひかるものを覚えます。唯々お健康を祈念しております。

二月に思うことは、釈尊の御入滅、和国の教主、聖徳太子の忌日に際して、日曜に皆様と談合しましたものからひろい書きいたしました、御判読願います。

四月中旬には、目下来日中の海野大徹師の御紹介で、はるばるハワイから二、三十人も聞法せられます由、御同朋御同行としてお迎えさせていただき、種々の質問を頂いて私の未知の世界への開眼をさせて頂きたいと楽しみにしております。

——○——

おわび

五月一日、六月五日の両月の第一日曜はやむない事情で例会を休ませて頂きます。

又、八月一杯は例年のように日講も例会も休ませて貰います故御諒承願います。

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜午后一時半。南区駈上町二の八八、花田宅

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、呼続下車

名鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

○四月二十四日は休みます。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫　電話八三一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十九巻　第四号　昭和五十二年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可